

# 協同組織金融機関のあり方

金融審議会WG  
2008年5月9日

筒井義郎  
(大阪大学経済学研究科)

# 本日の報告の構成

- 信用金庫の営業地域規制(中小専門規制)をどう考えればよいか
  - 金融機関の規制と競争度
    - 都銀 > 地銀
    - 銀行 > 証券 > 生命保険 > 消費者金融
  - 市場構造成果仮説
  - 効率性仮説
  - 市場分断

## ②組合組織と株式会社の どちらがよいか

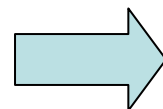
ガバナンスの問題

## ③協同組織に対して 税の減免をすべきか？

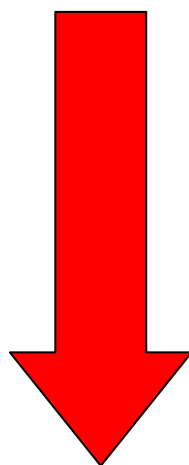
# 金融機関の規制と競争度

# 高度成長期

規制：護送船団方式  
銀行：横並び行動

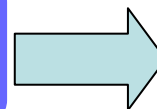


金融システムの  
安定性に寄与  
効率性に問題



金融自由化  
金利(価格)の自由化  
業務分野規制の緩和

金融業が競争的に変化

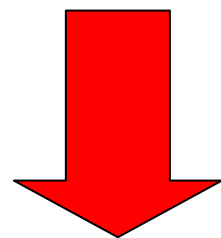


効率性の向上

# 高度成長期の問題点①

## 所得移転

低金利政策・預金金利規制



巨額の所得移転が発生

預金者



銀行



企業

1961～65、  
1年あたり

5967億円

3423億円

銀行に2544億円とどまった!!

## 高度成長期の問題点②

## 効率性

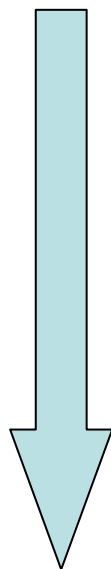
独占・寡占



高い価格

多い利潤

デッドウェイトロス  
(社会の誰にとっても損失)



経営の非効率性

地銀・第2地銀、  
1975年～89年、

貸出収入の1～3%にも

本間他(1996)

筒井(2005)『金融業における競争と効率性』第6章

この報告では、これまで書いたいくつかの論文に基づいて、

銀行・証券・生保の競争の程度を比較

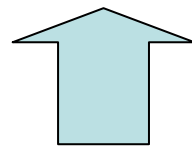
競争程度の改善の推移

自由化により金融機関は効率的になったか？

都銀（全国市場）はOKだが

地域金融機関の問題を指摘

低い競争度・高い金利



地域分断



# 競争の程度は、金融業によって違う

## 銀行業

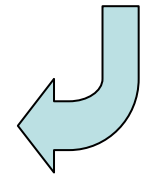
Uchida-Tsutsui(2005)

1980年代半ばまでに競争度が向上

分析方法

- ① 寡占モデルの推定
- ② 競争度が、金融自由化の進展で説明できるか？

国債市場の発達とともに競争度が向上



金利の自由化・業務分野規制緩和は説明力がない

1990年代前半には競争度が低下。  
後半でも、「独占的競争」

分析方法

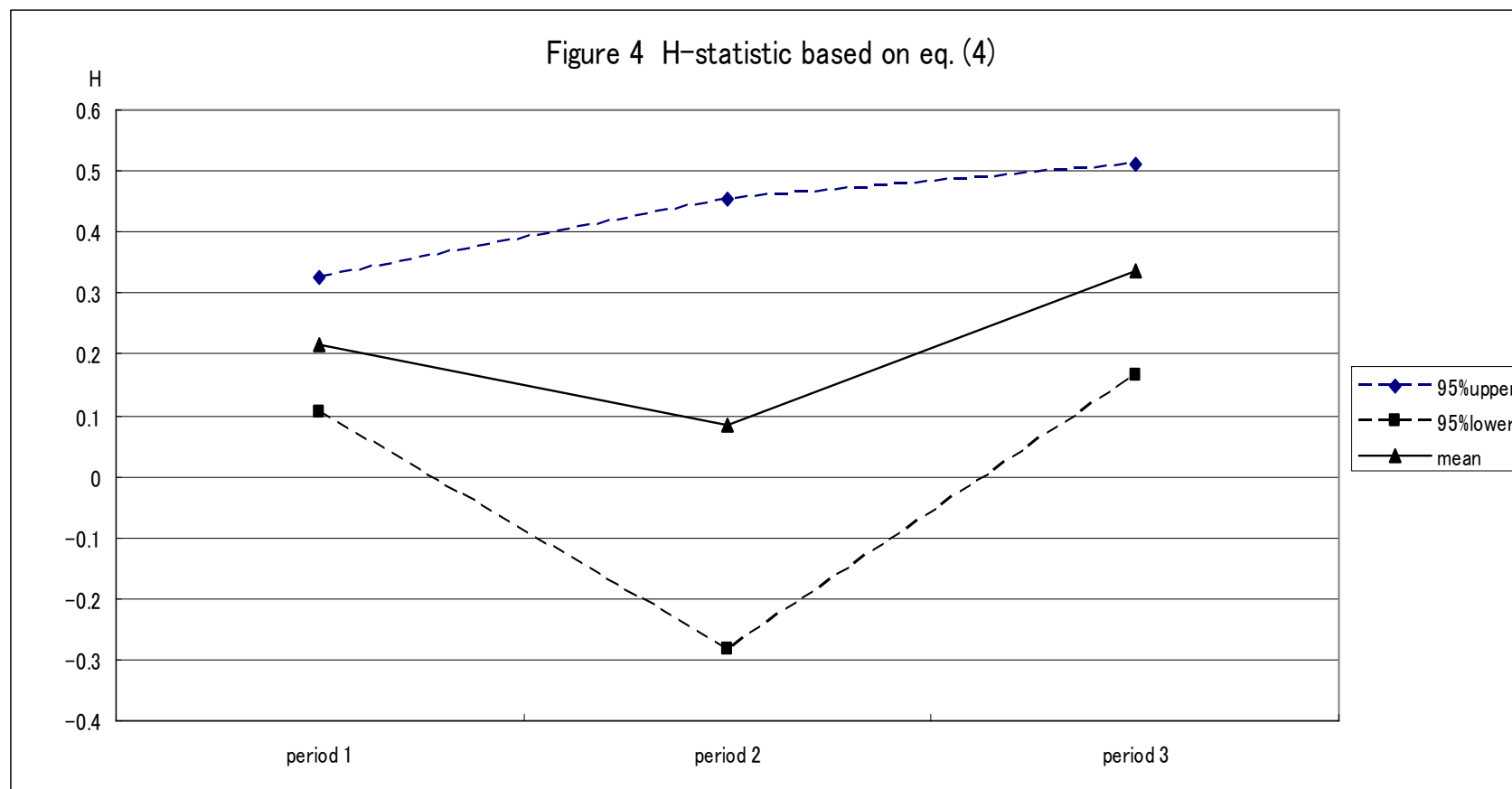
Panzar-RosseのH統計量

収入の要素価格弾力性の合計で競争度を判定

$H < 0$  ← 独占       $H < 1$  ← 独占的競争

$H = 1$  ← 完全競争

1983～88と1997～2002には「独占均衡」が棄却されるが、  
1991～96には棄却されない。  
3期間とも完全競争ではない。



# 生命保険業

Souma-Tsutsui(2005)

- 1996年の保険業法の改正→競争が向上。
- しかし十分でない。

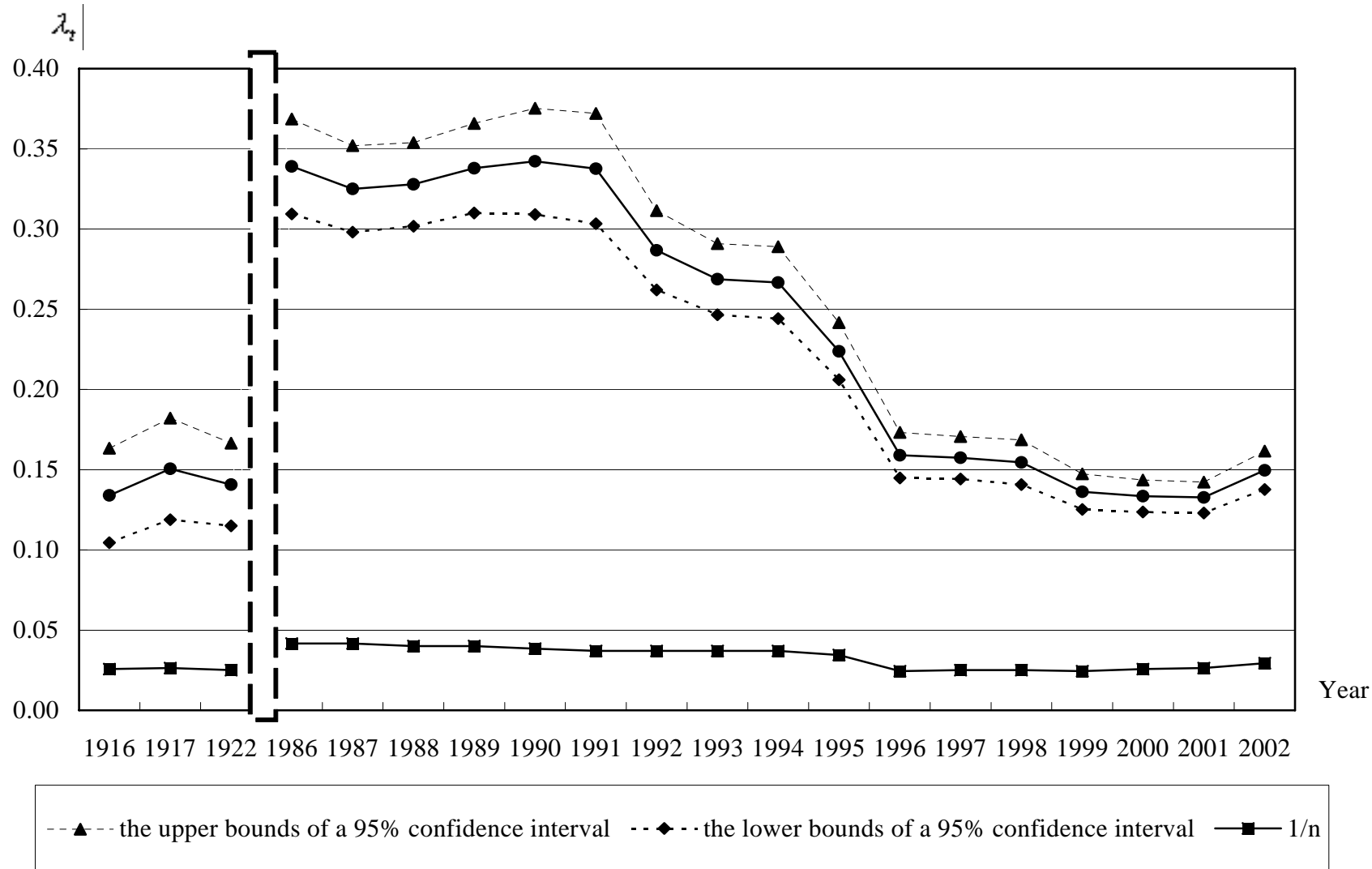
分析方法：寡占モデルの推定

$\theta = 1$  ← 共同利潤最大化(一種の共謀)

$\theta = 1/n$  ← クールノー寡占

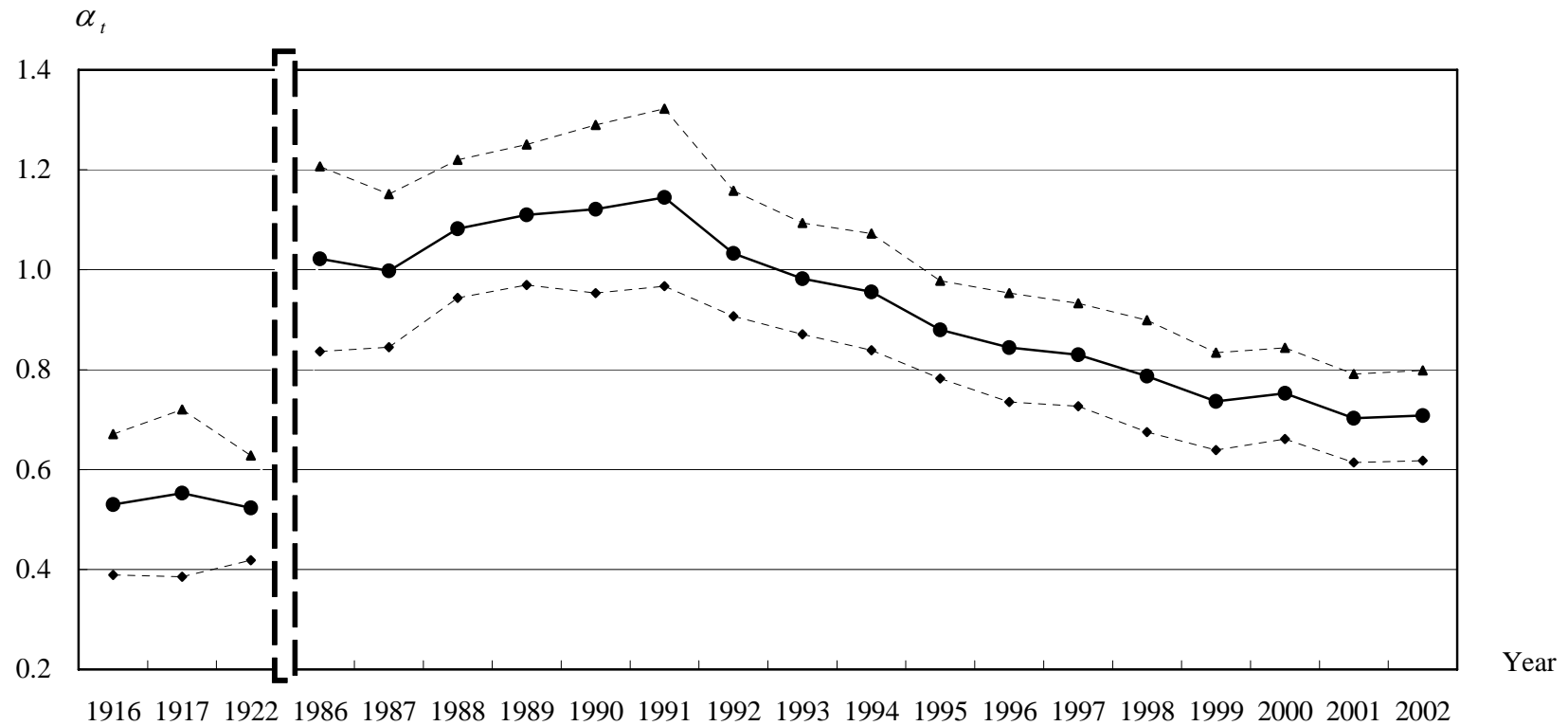
$\theta = 0$  ← 完全競争

# 競争度の推定結果



# 共謀度の推定

1996年まで、「完全な共謀」(1)を棄却しない。



--▲-- the upper bounds of a 95% confidence interval    --◆-- the lower bounds of a 95% confidence interval

# 消費者金融業

窪田・筒井（2008）

非常に多くの会社があるにもかかわらず、  
「独占」・「完全な共謀」の結果



借り手の返済不能確率が分からない

+

上限金利規制

# 結論

銀行の競争度がもっとも高い

生命保険業の競争度が最も低い？

推定方法が違うので比較がしにくい

金融業に対する政策的なスタンスの違いも、  
競争度の違いをもたらした  
重要な要因



# 銀行業の内部はどうか？

地方銀行・信用金庫 などの 地方貸出市場  
都市銀行・信託銀行 の 全国市場

地方貸出市場は地域的に分断されている

- 分析方法 ①県毎の平均金利が異なるか  
②分断を前提としたモデルが支持されるか

県別の貸出供給関数・需要関数の推定  
県民総生産、県の総預金が説明力を持つか？

## Kano-Tsutsui(2003)

1997年度

信金の貸出市場は県毎に分断

地銀の貸出市場は県毎には分断されていない

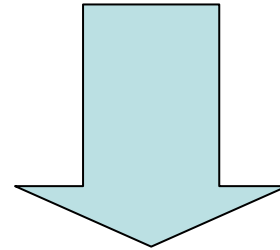
## Ishikawa-Tsutsui(2006)

1990～2002年度

地銀の貸出市場は県毎に分断

地銀の結果は少しあいまい  
しかし、たとえ県別でなくとも、  
数県の単位では分断されている

地域(県別)分断



好ましくない成果  
(高い貸出金利)

# ①地方銀行は都市銀行よりも 競争度が低い

Uchida-Tsutsui (2005)

分析方法：寡占モデルの推定

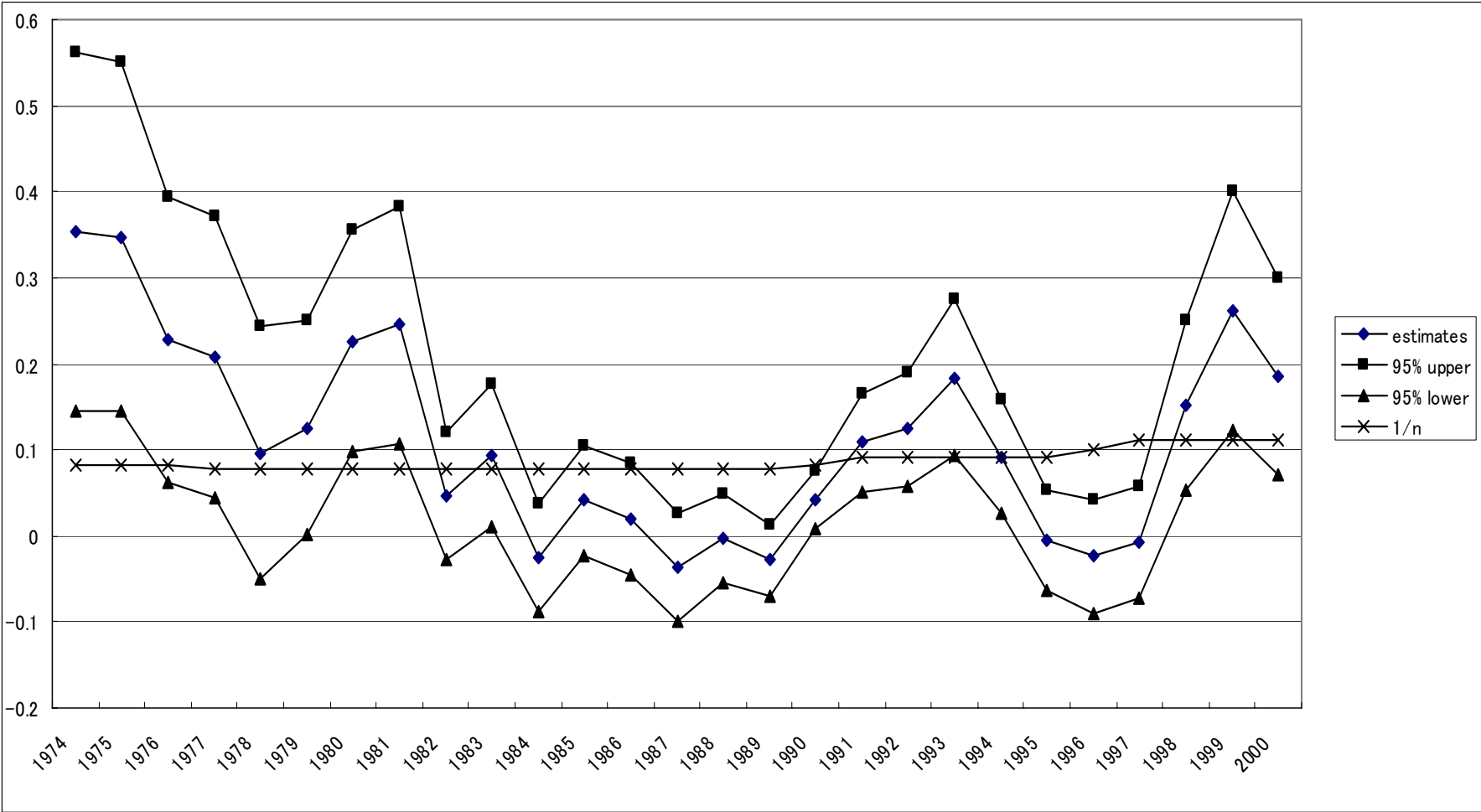
$\theta = 1$  ← 共同利潤最大化

$\theta = 1/n$  ← クールノー寡占

$\theta = 0$  ← 完全競争

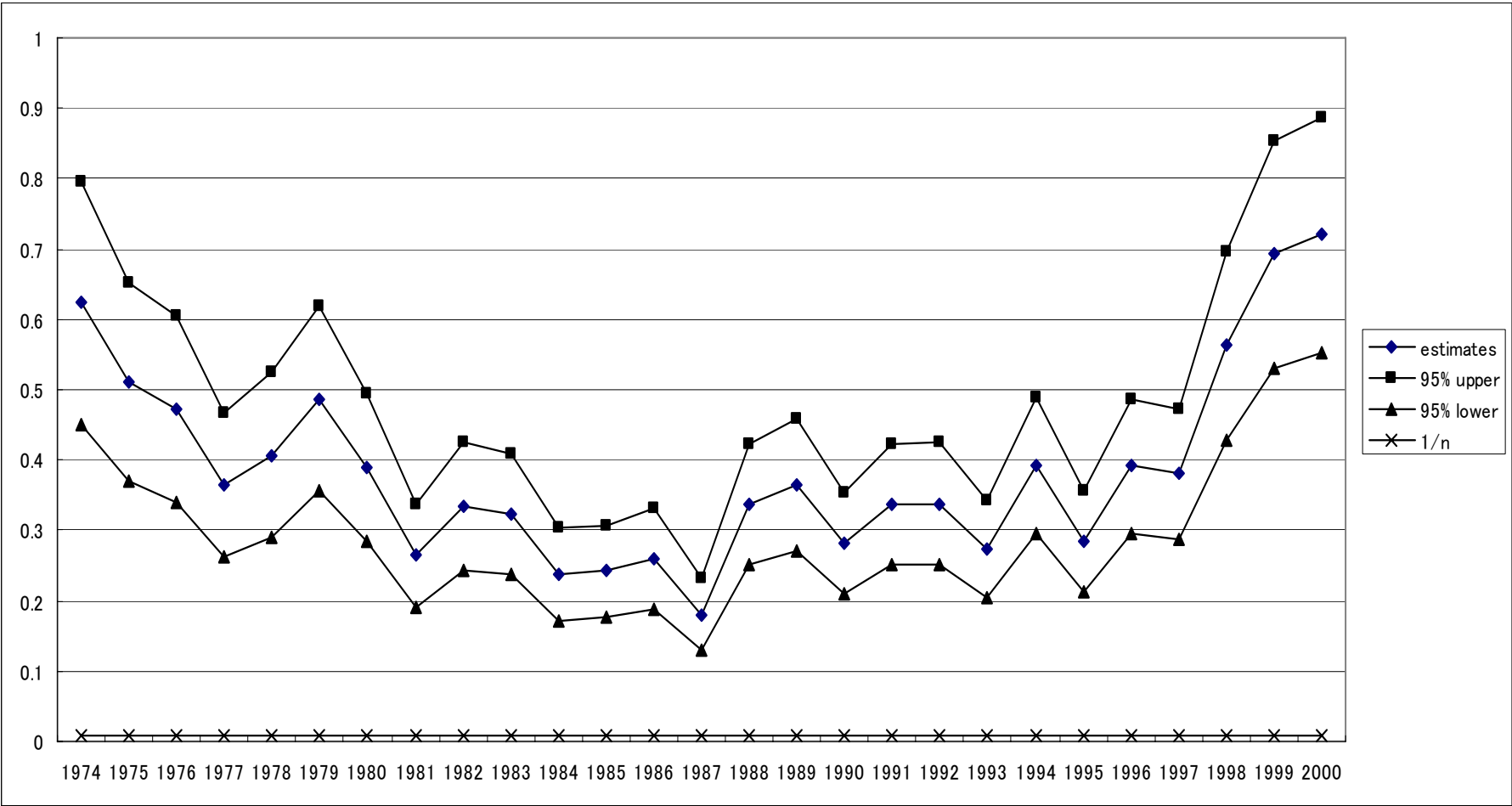
# 都市銀行の競争度

多くの年で完全競争(0)を棄却しない。



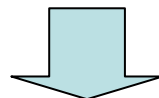
# 地方銀行の競争度

すべての年で完全競争(0)を棄却



② 市場集中度が高い県ほど  
貸出金利が高い

銀行数が少ない県の信金ほど



(競争が少なく?)



高い金利をつけている

Kano-Tsutsui (2003)

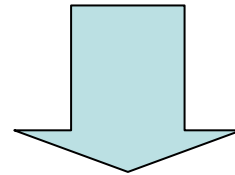
利潤についても同様(地銀)

Mori-Tsutsui(1989) <sup>23</sup>

# 2つの仮説：政策インプリケーションが逆

集中を排除する政策が望ましい

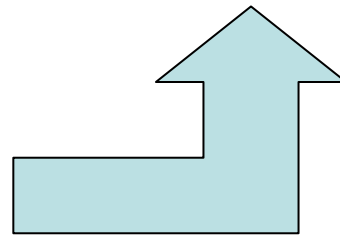
構造・成果仮説



合併には反対

合併禁止政策は弊害をもたらす

効率性仮説





## 日本の実証研究

③ 都市銀行については  
「効率性仮説」が成立

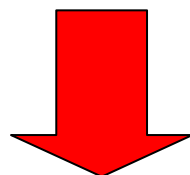
筒井・佐竹・内田(2006)

効率的な銀行ほど規模が大きくなっていく  
＝普通の競争的な市場

# 分析方法

## ① 非効率性の推定

銀行の営業経費のデータで  
費用関数を推定



## ② 非効率 次期の規模が小さい

1974年～2002年の都銀のパネルデータ

効率性仮説が成立  現在改訂中

# 地方金融機関についても 効率性仮説が成立するか？

地銀の競争度が低い

信金で、集中度が高いほど金利が高い

といった結果が得られていることを考えると...

効率性仮説は成立しないかも??

京都の信金について：効率性仮説は否定される。

佐竹・筒井(2003)

## 全国の信金では？

筒井(2005)「信用金庫と効率性仮説」

1993年～1997年に継続して存在した信金401庫を分析対象

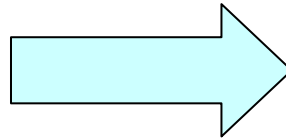
暫定的・予備的な分析

結果は、定式化によって異なる。

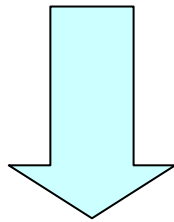
地銀・信金についての分析が課題

# 結論

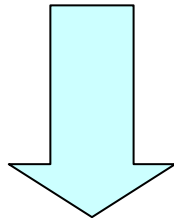
地域分断



競争度の低下  
高い貸出金利

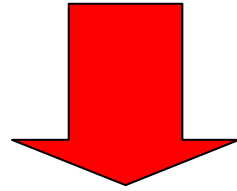


一地域に貸出先が限定

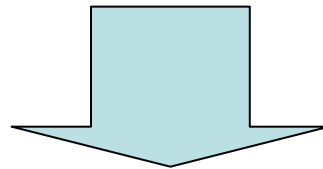


貸出のポートフォリオリスク増大

地元企業の不振による銀行倒産の可能性



地域を越えた相互参入の促進  
信金に対する営業地域規制の緩和



効率性の確保

**組合組織は効率的か？**

# ガバナンス

## 理論的考察

会社の所有者が、経営者や従業員を意思のまま動かすこと

所有構造が散漫 → 所有者の意思がまとまらない

ガバナンスが弱い ← ① 会員 (=一人一株) vs 株主

② 上場株式会社

株式投資家が企業収益の観点から経営を監視

株価の変動が経営に対してガバナンスになる

組合組織のほうが  
株式会社より弱い

② 上場 > 非上場



# 実証研究

株式会社のガバナンスについては多くの研究

- ・株式所有構造と会社のパフォーマンスの関係
- ・取締役会(人数)とパフォーマンスの関係

組合組織についてはあまりない

- ・Mester (1993) : フロンティア費用関数を推定。

相互会社形態の方が株式会社形態よりも平均的に効率的。

- ・Verbrugge and Jahera (1981) : 経費愛好仮説。

相互会社形態の方が株式会社形態より経費愛好の程度が強い。

- ・Blair and Placone (1988) : Verbrugge and Jahera (1981)より広範囲のサンプルを用いると、経費愛好仮説はS & Lに成立しない。  
Verbrugge and Jahera (1981)に反論。

# 日本の金融機関の実証研究

- Fukuyama *et al.* (1999) : DEAの手法によって日本の信用組合の効率性を推定。民族系の信用組合の効率性が高い。
- 宮村(2000): 1997年の信用金庫の業務費用に世襲と長期在職が影響を与えるか？  
世襲については、影響の可能性が否定できない。
- マッケンジー(2002): 日本の生命保険の効率性が組織形態に依って違うか。  
相互会社のダミー変数を含む費用関数を推定、小規模会社では相互会社の経費が小さく、大規模会社では株式会社の経費が小さい。

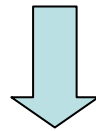
# 「協同組織金融機関の経営効率性」

筒井(2003)

2001年度の

地方銀行、信用金庫、信用組合の  
経営効率性を比較。

規模の経済性  
(=大規模銀行の方が効率的)



同一規模の地銀と信金を比較

# 同一規模の経費率の比較

- ・ [図2](#)と[図3](#)には地銀と信金を比較しやすいように、それぞれ、預金残高が3兆円以下と1兆円以下のサンプルに限った散布図を示している。
- ・ どちらの図においても、同一規模の金融機関を比較すると、信金の方が地銀より営業費用が小さい場合が多いように見える

図2 金融機関の散布図(預金残高3兆円以下)

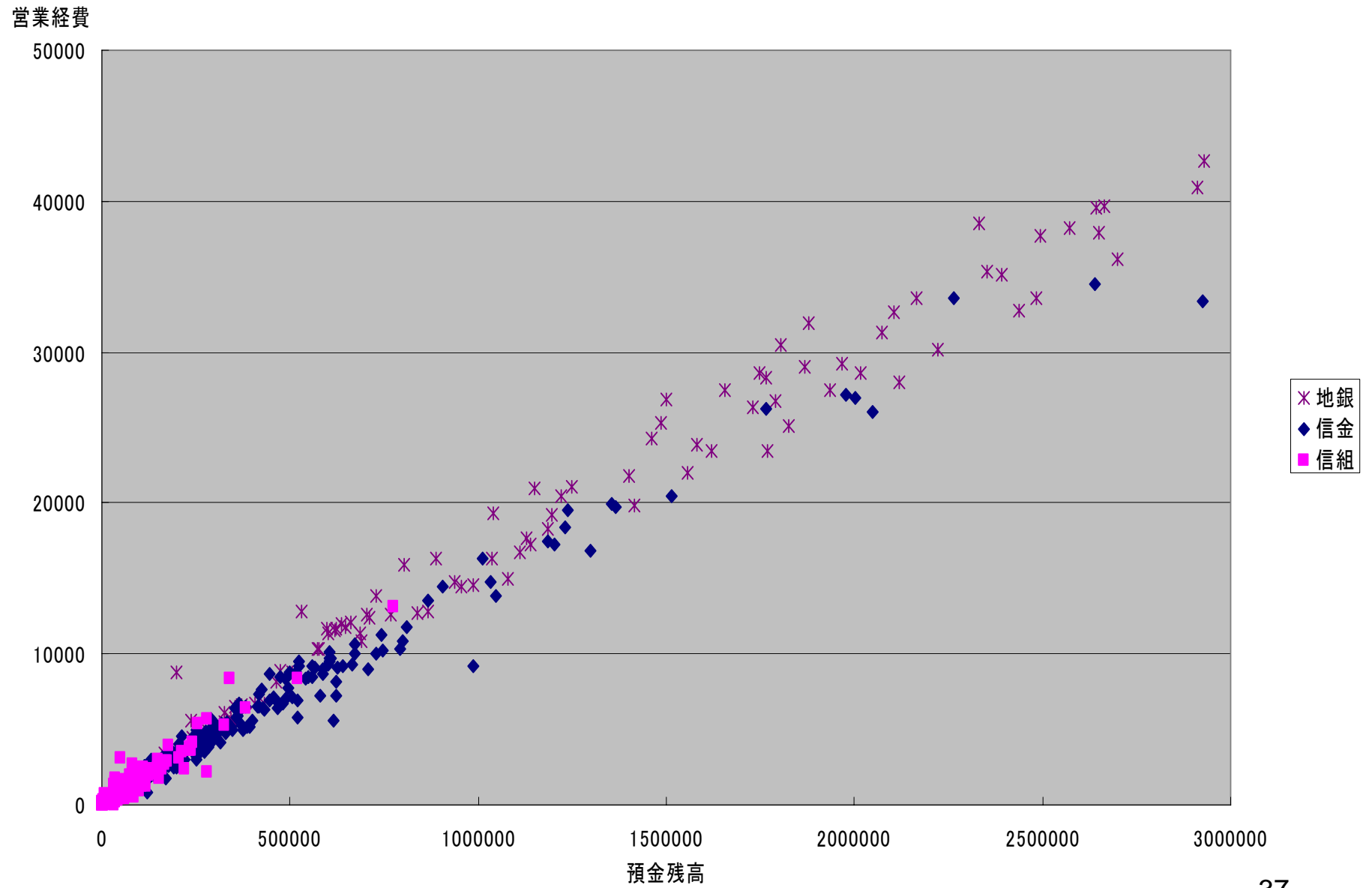
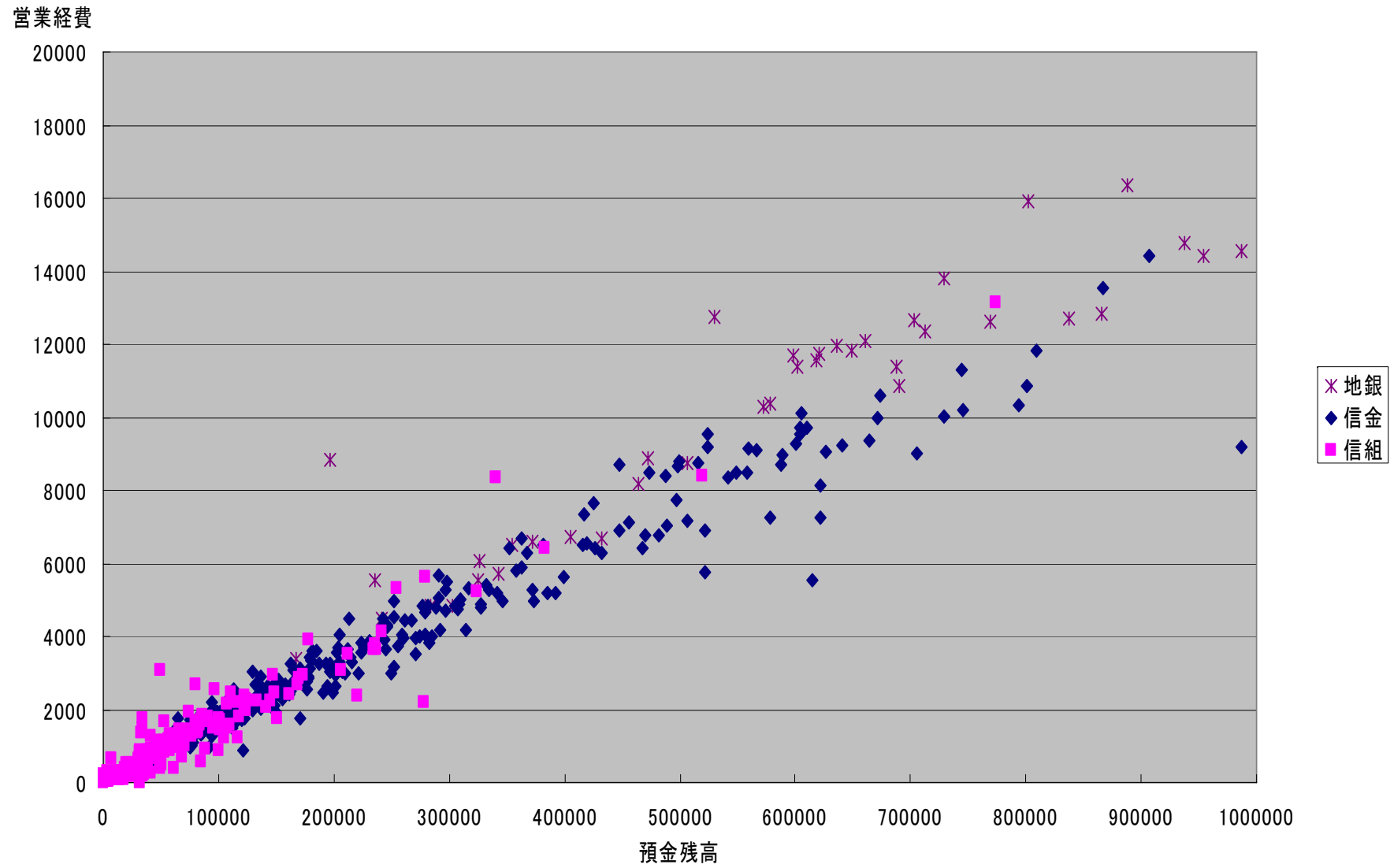


図3 金融機関の散布図(預金残高1兆円以下)

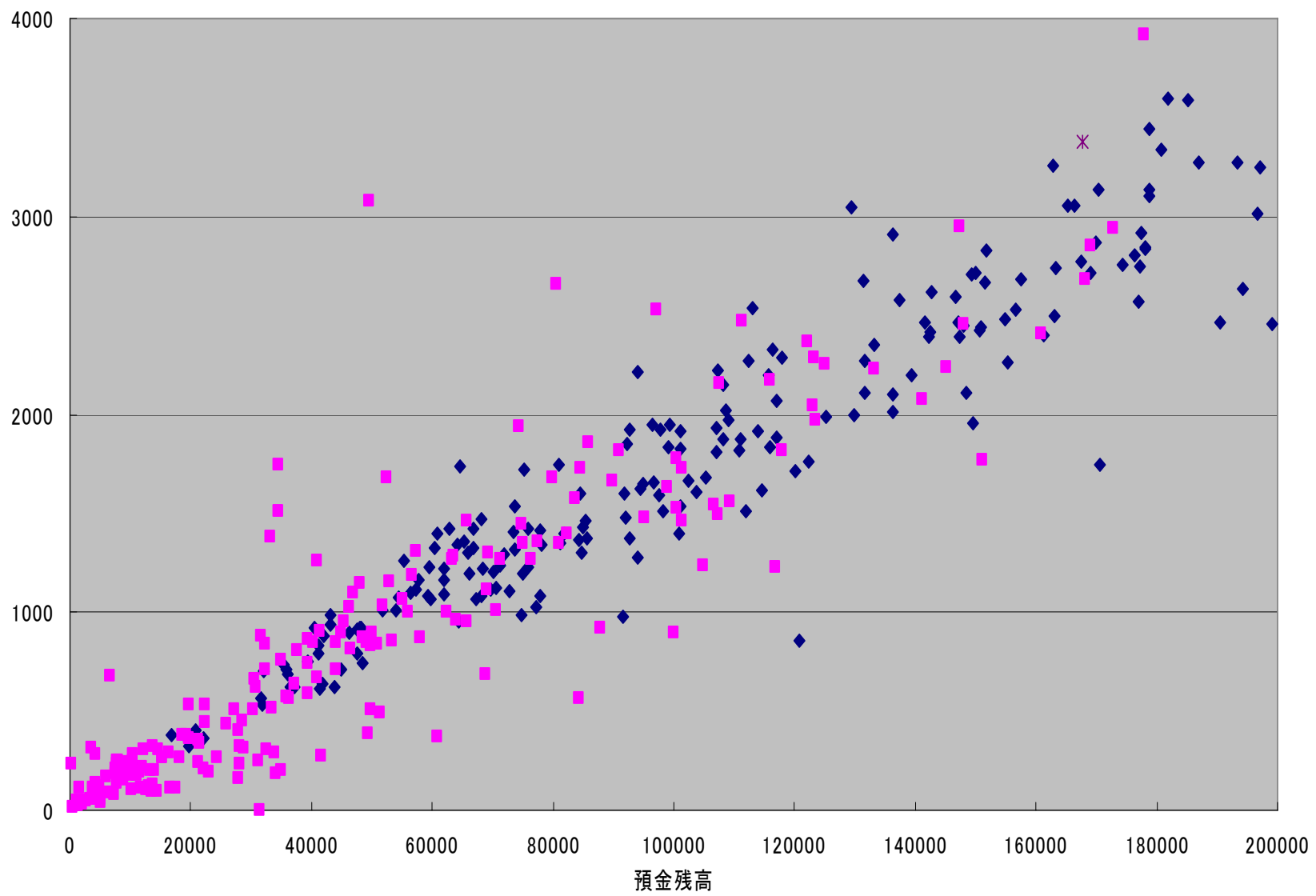


# 信金と信組を比較

- ・ [図4](#)：預金残高が2千億円以下のサンプルに限った散布図
- ・ 信用組合の方が広く散らばっているが、どちらの方がより上に位置しているとは言えない

図4 金融機関の散布図(預金残高2千億円以下)

営業経費





# より高度な分析

費用関数などに、業態、上場ダミーを付け、その符号を見る

- 規模の変数に貸出をとるか預金をとるかによって異なる結果
- 貸出と預金を産出物と仮定した費用関数の推定。  
信用組合が効率的。
- 同じ定式化で、フロンティア費用関数を推定。  
逆に、信用組合が非効率的だという結果。
- 経費愛好仮説に基づく分析。経費愛好の程度が小さい方から並べて、上場地銀、非上場地銀、信組、信金という結果。

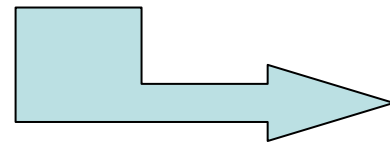
このように、結論は分析方法によって変わる

協同組織形態と株式会社形態のどちらが効率的であるか、  
という問に実証的な解答を見いだすことは予想外に困難

なぜ、株式形態・上場の方が効率的という予想された結果が得られないのか

## 私の推測

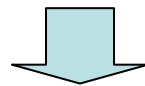
株式会社(地銀)においてもガバナンスが不十分



差が分からない

一方で、都銀は地銀より競争的という結果

地銀・信金は不完全市場で、競争が十分でないため、  
利益を重視しなくても生きていける。



規制緩和により、競争を激しくすれば、  
株式形態の方が効率的という結果になるはず<sup>42</sup>

# 組合金融機関に対する税の減免

# 組合金融機関に対する税の減免

もし、中小企業に対する補助が目的ならば

中小企業が資金を融通されるときに  
補助を受ける方が自然な形

∴

- ① 中小企業は銀行からも融資を受けている
- ② 金融機関に対する補助は、  
借り手に回らない可能性がある

高度成長期の低金利政策の例

# 補助金は借り手（当事者）に与える方が、 金融機関に与えるより良い

ただし、金融機関が資金融通以外の役割を果たしていれば別

## 地域コミュニティへのサービス？

しかし、金融機関に対する補助は多く行われている

政府系金融機関 vs 金利補助・信用保証制度

郵便貯金は民営化された

大学の例

# 参照文献

- 『金融業における競争と効率性』東洋経済新報社、2005年6月。
- 『金融市場と銀行業－産業組織の経済分析－』東洋経済新報社、1988年6月。
- 「協同組織金融機関の経営効率性」Discussion Paper 03-10 (Osaka University)、2003年5月。
- 「信用金庫と効率性仮説」ISER Discussion Paper No. 626, 2005年2月。
- 「都市銀行における効率性仮説」RIETI Discussion Paper Series 05-J-027 2005年9月。(佐竹光彦、内田浩史と共著)
- 「効率性仮説と市場構造＝行動＝成果仮説：再訪」RIETI Discussion Paper Series 06-J-001、2006年1月。(佐竹光彦、内田浩史と共著)
- 「なぜ京都は信金王国なのか？：efficiency structure 仮説の視点による分析」湯野勉編著『京都の地域金融』日本評論社、2003年3月、第4章、71-108頁。(佐竹光彦と共著)
- 窪田康平・筒井義郎 (2008)「消費者金融業の競争度」mimeo.。

- “Has Competition in the Japanese Banking Sector Improved?” *Journal of Banking and Finance*, vol. 29, no. 2, pp. 419-439, February 2005. (with Hirofumi Uchida)
- “Degree of Competition in Japanese Securities Industry,” *Journal of Economics and Business*, 57 (4), 360-374, June 2005. (with Akiko Kamesaka)
- “Recent Competition in Japanese Life Insurance Industry,” ISER Discussion Paper No. 637 (Osaka University) June 2005. (with Toshiyuki Souma)
- “Geographical Segmentation in Japanese Bank Loan Markets,” *Regional Science and Urban Economics*, vol. 33, no. 2, pp.157-174, March 2003. (with Masaji Kano)
- “Adjusted Interest Rates and Segmentation Hypothesis of Japanese Bank Loan Markets,” *Osaka Economic Papers*, vol. 53, no. 1, pp. 1-15, June 2003. (with Masaji Kano)
- Daisuke Ishikawa and Yoshiro Tsutsui, “Has the Credit Crunch Occurred in Japan in 1990s?” RIETI Discussion Paper Series 06-E-012, March 2006.
- Mori, N. and Y. Tsutsui (1989) “Bank Market Structure and Performance: Evidence from Japan,” *Economic Studies Quarterly*, Vol. 40, No. 4, pp. 296 – 316.

- Fukuyama, H., R. Guerra, and L. Weber (1999) “Efficiency and Ownership: Evidence from Japanese Credit Cooperatives,” *Journal of Economics and Business*, Vol. 51, pp. 473-487.
- Mester, L. J. (1989) “Testing for Expense Preference Behavior: Mutual versus Stock Saving and Loans,” *RAND Journal of Economics*, Vol. 20, pp. 483-498.
- Mester, L. J. (1993) “Efficiency in the Savings and Loan Industry,” *Journal of Banking and Finance*, Vol. 17, pp. 267-286.
- Scott, W. L., M. J. Gardener, and D. L. Mills (1988) “Expense Preference and Minority Banking: A Note,” *The Financial Review*, Vol. 23, pp. 105-115.
- Verbrugge, J. E. and J. S. Jahera (1981) “Expense Preference Behavior in Saving and Loan Industry,” *Journal of Money, Credit and Banking*, Vol. 13, pp. 465-76.
- 本間哲志・神門善久・寺西重郎(1996)、「高度成長期のわが国銀行業の効率性」『経済研究』第47巻第3号、248-269頁。
- マッケンジー・コリン(2002)「生命保険相互会社の株式化について」林敏彦松浦克己編『金融変革の実証分析』日本評論社、第7章、219-240頁。
- 宮村健一郎(1999)「協同組織金融機関におけるコーポレートガバナンス—「世襲」と「長期政権」の問題—」、『経営論集』51号、249-262頁。



これで終わりです。  
ご静聴ありがとうございました。